様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 30 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５２０３３４
研究課題名（和文）　日本統治期台湾における「大衆文学」研究－探偵小説を中心に
研究課題名（英文）　Study of “Popular literature” in Taiwan during Japanese Colonial Rule in Taiwan.
研究代表者
星名　宏修（HOSHINA HIRONOBU）
一橋大学・大学院言語社会研究科・准教授
研究者番号：００２８４９４３

研究成果の概要（和文）：日本内地で多くの読者を擁した探偵小説は、台湾においては統治の第一線に立つ警察関係者を主な書き手／読み手とする閉ざされた空間内でのみ流通していた。内地の「大衆文学」が、植民地では「大衆」的な読者を得られていない点に、台湾における植民地近代（Colonial Modernity）の特徴が集中的に現れている。

研究成果の概要（英文）：In Japan there were many readers of the detective story. However in Taiwan, only police officers were detective story's readers and also creators. It was “popular literature" in Japan. But did not have many " general public "readers in the colony. This is the characteristic of colony modern times in Taiwan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００９年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１０年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：台湾文学
科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論
キーワード：探偵小説、読者、大衆、植民地近代

１．研究開始当初の背景

「ポストコロニアル」研究の広がりとともに、世界各地の植民地文学が新たな研究対象として注目されている。日本統治期の台湾文学も、日本や台湾だけでなく、中国・韓国・アメリカ・ヨーロッパなど世界各地で、様々な角度から研究がなされるようになった。また文学以外の研究領域から台湾文学を読み解こうとする試みも、すでに始まっている。

こうした研究動向の中で、近年とりわけ注目されているのが「植民地近代性（Colonial Modernity）」に関する議論である。台湾や朝鮮など日本の統治下に置かれた植民地社会が、近代化を達成したということは、以前から主張されていた。そうした近代化論は、植民地支配を免罪し、それを肯定する言説として唱えられていた側面も否定できない。だが

「達成」された「近代化」とは、いかなるものであったのか？急速に進行した都市化は、人々の生活をどのように変えていったのか？植民地に生きる文学者（植民者／被植民者）は、近代化に伴う社会の変貌を、どのように表現したのだろうか？

台湾文学史において「成熟期」と位置づけられる 1930 年代の文学は、台北の変貌とそこに生きる人々の姿を、好んで題材としてきた。そこには「モダン」で豊かな消費生活だけではなく、世界的な大不況の影響を受けた「貧しき人々」の姿も、数多く描かれている。特に台湾人文学者にとって、「貧民」や「失業者」の悲惨な生活を描写することは、植民地統治に対する「抵抗」であった。しかし植民地当局は、そうした貧しき人々に対して監視の目を注ぎ続け、各種の社会事業によって、彼らが「危険な階級」に「転落」するのをくいとめようとした。つまり 1930 年代において、「貧民」は、総督府とその統治を批判する双方にとって、重要な問題系として浮上していたのである。

そうした中、貧民の増加を愁い、彼らが引き起こしかねない犯罪から社会の防衛を欲望する文学ジャンルとして、植民地支配の第一線に立つ警察関係者を主要な書き手／読み手とする「探偵小説」が、1930 年代以降に大量に創作された。同時期の日本「本土」においては、多くの「読者」を魅了した探偵小説であるが、台湾におけるそれは、作者と読者が警察関係者に閉じられた、いわば「大衆性」とは無縁の「大衆文学」であることを顕著な特徴とする。こうした「特異」な探偵小説研究は、植民地台湾における「大衆文学」とは何であったのか？それらを「消費」する読者「大衆」とはいかなる存在だったのか、という問題にも繋がっていく。

２．研究の目的

従来の台湾文学史は 1930 年代を「成熟期」とし、1937 年に日中全面戦争が勃発した後の「皇民化運動期」と対比的に位置づけてきた。だが実際には、すでにこの時期に、「皇民化運動期」に強化される社会統合策は、貧民救済を重要な柱として展開されていたのである。台湾の「特異」な大衆文学としての探偵小説は、植民地支配と文学的抵抗の交錯する「場」において、解読されなければならない。こうした作業によって、従来の「成熟期」的な解釈とは異なる 1930 年代の文学像の構築を第一の目的とした。

また「皇民化運動期」のテクストについても、それ以前の時期からの「断絶」ではなく、読者大衆の「連続性」という切り口から、読書と戦争動員という問題にも新たな知見を提出することを目指した。

３．研究の方法

1930 年代の台湾における「植民地近代性」の諸相を、「島都」台北の変容と同時に、「貧民」や「犯罪者」に関する言説を通して検討すること。さらに警察官を書き手／読み手とする探偵小説を「大衆文学」の枠組みの中でどのように分析するのかという点が、本研究の眼目となる。そのため、以下の４つの分野にわたる資料を重点的な収集対象とした。

(1) 台湾大学図書館や国家中央図書館台湾分館が所蔵している『台湾警察時報』『台法月報』『台湾司法保護』『社会事業の友』などの文献から、「貧民」や「犯罪者」に関する言説、さらに社会事業に関する統治者側の論考を収集する。

(2) 戦前の日本本土や植民地で展開された社事業、とりわけ「貧民救済」に関する資料。

(3) 『台湾日日新報』『台湾新聞』『台湾新民報』などの新聞、または『台湾実業界』など各種の経済誌の分析を通じて、「島都」台北のモダン都市化現象がどのように語ら

れていたのかを把握する。

(4)1930年代以降の台湾における探偵小説。

上述した資料収集と並行して、近年、東アジアの近代史研究の分野で盛んに論議されている「植民地近代性」や「モダニズム論」の分析検討を行う。

さらに日本近代文学において、典型的な「大衆文学」の一ジャンルであった探偵小説は、植民地台湾においては、読み手も書き手もほぼ警察関係者に閉じられたかたちで流通していた。こうした特異性をもつ探偵小説を論じるためにも、日本近代文学研究の領域で蓄積されてきた探偵小説論に関する先行研究を整理検討する。

４．研究成果

3 年間の研究期間には、最近めざましく進展した台湾における大衆文学研究の成果を踏まえながら、植民地における日本語「大衆文学」、とりわけ探偵小説に焦点を当て、その読者像を明らかにすることを目標とした。

そもそも「大衆文学」とは、日本「内地」においては、関東大震災後の「帝都復興」に伴い登場した「大衆」の存在を大前提としている。栗原幸夫が的確に述べたように、「文学における大衆的読者の出現、そしてそのあたらしい読者層の要求に答えるべく登場したのが明治以来の「通俗小説」とは異なった、モダンな感覚をもった「大衆文学」」であり、「大衆（的読者の出現)」なくして、「大衆文学」は誕生しえない。

台湾においては「植民地近代性」論の流行もあり、「読者大衆」に対する研究はブームのようになっている。だが栗原が提起にしたような問題意識から「通俗文学」と「大衆文学」の相違について、「大衆」のあり方も含めて論じたものは、管見のかぎりでは見当たらない。

こうした現状に鑑み、1930年代の台湾における「読者大衆」像を明らかにすべく、「大衆文学」の一ジャンルである「探偵小説」という切り口を設定した。英文学者高山宏の見解によれば、探偵小説とは、「社会の不安を和らげ、再統合をはかるために語られ」るものであり、「不安の消費を通じて、近代社会の社会性が再確認され、権力の監視機能が中継され」る側面を有しているという。本研究においては、1930年代に急速に変容する「島都」台北のありようを「貧民」・「犯罪者」言説を通して検討することで、植民地台湾に限定されない探偵小説論に接続しようと試みた。

研究初年（2008）度に執筆した「「読者大衆」とは誰のことか？」は、台湾や日本における先行研究を整理しながら、植民地における「読者大衆」の内実を問うたものである。またこの論文は、私が翻訳した台湾人研究者陳偉智の論文「患ったのは時代の病」への応答でもある。陳偉智論文は、30年代に日刊化された『台湾新民報』の「学芸欄」や漢文雑誌『風月報』にコラムを連載し、多くの読者を有していながら今日忘れ去られてしまった雞籠生の仕事を、ベンヤミンの「遊歩者」という概念によって紹介し、同時に 1930 年代の「読者大衆」論にアプローチした点で注目される。

2008年度は論文執筆のほかに、2本の学会発表を行った。

(1)「萬華と犯罪－林熊生「指紋」をめぐって」(2008.8.2、国際共同シンポジウム『帝国主義と文学－植民地台湾・中国占領区・「満州国」』、愛知大学)

日本内地で「大衆文学」として多くの読者を獲得した探偵小説は、植民地期台湾においては読者・作者が警察関係者に限定された特殊な文学ジャンルであった。だが大東亜戦争

のさなかに発表された林熊生（金関丈夫）の「指紋」は、従来の台湾探偵小説にはない特徴をもっている。同時期の台湾「皇民文学」の最も重要なテーマであった「アイデンティティ」とは異なる形で、生物学的・人類学的な「同一性」を扱った作品として「指紋」を論じた。

(2)「ラジオと「蕃地」－中山侑のラジオドラマを読む」(2009.3.17、重点研究国際シンポジウム往来する都市文化－《断片》から探るアジアのネットワーク、大阪市立大学)

1930年代に台湾でも「普及」したラジオは「近代」を代表するメディアであり、「ラジオドラマ」という全く新しい文学ジャンルを生み出した。しかしラジオ放送は、被植民者への「国語」普及を目的に掲げ、日本語中心の番組編成がなされていた。台湾人の「国語」リテラシーとかけ離れた番組内容のために、日本人と台湾人との間で大きな聴率の差が生じてしまう。さらに聴取者の多数を占める日本人の関心を引く「蕃人」ネタが、多くの番組で採用されている点も注目されるだろう。だが日中戦争が勃発すると、台湾人を戦争に動員するツールとしてラジオの重要性が再確認され、番組のあり方は大きな変更が迫られることになった。最も劇的な変化は、「国語」政策とは矛盾する、「福建語」放送の開始であった。

本報告は、中山侑のラジオドラマを題材として、そこに描かれた「蕃地」像の変遷を論じたものである。「蕃地」の駐在所に勤務する警察官の奮闘ぶりを描いてきた中山侑のラジオドラマは、現存する最後の作品「風」のなかでその作風を一変させ、彼らの不安や孤独を全面に押し出している。それは「淋しい深山暮し」ではなく、彼らが日常的に接している原住民に対する統治者の潜在的な恐怖を映し出しているである。

研究の2年目（2009年度）に行った研究の概要は以下の通りである。

2008 年度の国際シンポジウムでの報告に引き続き、林熊生（金関丈夫）の小説「指紋」に焦点をあてた論文「司法的同一性と「贋」日本人－林熊生「指紋」をめぐって・その2」を執筆した。『立命館文学』に掲載されたこの論文は、「司法的同一性」という切り口から、小説に描かれた「偽造旅券」の問題と、主人公の逃亡先である廈門という地域が台湾および帝国日本にとっていかなる意味を持っていたのかを考察した。

また、本研究課題とは直接的には繋がらないが、日本台湾学会創立 10 周年の企画として、この 10 年間の台湾文学研究の現状と課題を報告し、『日本台湾学会報』に「台湾文学研究、この10年、これからの10年」を執筆した。

最終年度となる2010年度には、2008年度の国際シンポジウム（「帝国主義と文学」）で行った林熊生に関する報告に手を加え、論文「萬華と犯罪－林熊生「指紋」をめぐって」にまとめた。この論文は、本研究課題を総括するものである。

また国際シンポジウムで2度の発表を行った。いずれも植民地台湾の大衆文化を論じたものである。

(1)「『跳舞時代』の時代」(2010.11.3、国際シンポジウム 東アジアの越境・ジェンダー・民衆―ドキュメンタリーと映画から見た日台関係の社会史、一橋大学)

この報告では、2003年に台湾で作られたドキュメンタリー『跳舞時代』をめぐって、1930年代の台湾が単なる「黄金時代」・モダン時代ではありえないこと、多くの台湾人文学者が、「モダン」台北の光と影を描いているこ

とを、具体的な作品分析を通じて論じた。

(2)「何謂「海外進出」：試析紺谷淑藻郎海口印象記」(2010.11.19、跨國的殖民記憶與冷戰經驗：台灣文學的比較文學研究國際學術研討會、台湾・清華大学)

植民地と冷戦の記憶をテーマとした国際シンポジウムにおいて、戦前日本の代表的な「大衆作家」であった火野葦平を取り上げ、彼が描いた海南島表象を、在台日本人である紺谷淑藻郎の「海口印象記」と対比させることで、重層的な植民地支配の有り様を読み解いた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①星名宏修、司法的同一性と「贋」日本人－林熊生「指紋」をめぐって・その２、立命館文学、査読有、615 号、2010、129-143

②星名宏修、
台湾文学研究、この 10 年、これからの 10 年、日本台湾学会報、査読無、11 号、2009、67-74

〔学会発表〕（計４件）
①星名宏修、跨國的殖民記憶與冷戰經驗：台灣文學的比較文學研究國際學術研討會、何謂「海外進出」：試析紺谷淑藻郎海口印象記、台湾清華大学、2010 年 11 月 19 日、台湾新竹

②星名宏修、国際シンポジウム「東アジアの越境・ジェンダー・民衆―ドキュメンタリーと映画から見た日台関係の社会史―」、『跳舞時代』の時代、一橋大学、2010 年 11 月 3 日、東京

③星名宏修、重点研究国際シンポジウム往来する都市文化－《断片》から探るアジアのネットワーク、ラジオと「蕃地」－中山侑のラジオドラマを読む、大阪市立大学、2009 年 3 月 17 日、大阪

④星名宏修、
国際共同シンポジウム『帝国主義と文学－植民地台湾・中国占領区・「満州国」』、萬華と犯罪－林熊生「指紋」をめぐって、愛知大学、2008 年 8 月 2 日、名古屋

〔図書〕（計３件）
①星名宏修、他、研文出版、帝国主義と文学、2010、529（339-363）

②星名宏修、他、大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター、往来する都市文化 ： 《断片》から探るアジアのネットワーク、2009、177（37-58）

③星名宏修、他、研文出版、越境するテクスト－東アジア文化・文学の新しい試み、2008、434（195-207）

６．研究組織
(1)研究代表者
星名　宏修（HOSHINA HIRONOBU）
一橋大学・大学院言語社会研究科・准教授
研究者番号：００２８４９４３